

短い軍用マントであるクラミュスと
革鎧を身につけたマケドニアの兵士

兵士は装飾の施された大盾を持ち、
大きな羽根飾りの兜をつけている

サンダルの紐を
くるぶしの上までかけている

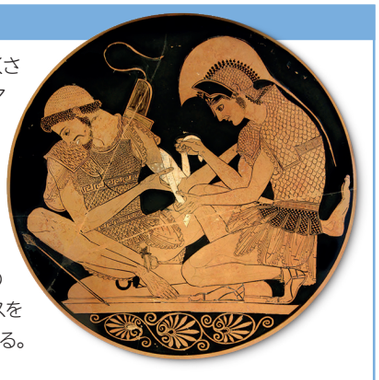
た大型壺が、墓によく用いられた（→pp.66-67）。前6世紀からは、等身大の若者や娘を表した石像（クーロス像、コレー像）が墓に見られるようになり、アテネでは墓石や石碑（ステラ）が導入されて死者を悼む碑文が刻まれた。こうした墓碑は、装飾も形状も実に精巧だった。特に男性のための墓標には、故人を運動競技者か戦士の姿で表した彫刻が多く施され、生者の世界から死者が旅立つ別れの場面が表現された例もあった。前430年頃から、石碑には家庭内のさまざまな情景が彫刻や絵画で表され、そうした場面で女性の姿が目立ってきた。このような家族の関係を重視した描写では、故人を生前の姿で表していた。

葬儀の一環として、墓の中に副葬品を納めたり墓所に供物を捧げたりすることで、故人に敬意を表し、また死者がその品々とともに死後の世界へ旅立てるようにした。供物の量や値打ちは、死者の地位によってさまざまであり、家庭用品である器や糸つむぎの紡錘車のような簡素なものから、宝飾品や、高度な装飾を施した実用目的ではない壺まで幅広かった。

“親の死に際しては、最も質素な葬儀が最善である”

プラトン『法律』

葬礼競技



英雄を讃える壮大な葬礼競技会に言及した文学はたくさんある。『イリアス』では、アキレウス（右）が、トロイア戦士ヘクトルに殺されたパトロクロス（左）を弔う競技会を開く。戦車競走、徒競走、拳闘の試合、弓術などが行われ、賞品として屈強な雄牛、三脚釜、馬、「美しい礼帯をつけた女性たち、および灰色の鋼鉄」などが集められた。参加者たちは、テーバイでオイディプスのために催された葬礼競技など、かつて出場した大会のことも回想している。『オデュッセイア』では、アキレウスを讃えて行われた競技について、アガメムノンの亡霊が語る。



△ 王家の墓
アイガイのマケドニア王家墳墓群の1号墓には、おそらくフィリッポスの妻の1人が眠っている。装飾のフレスコ画には、ハデスによるペルセフォネの誘拐が描かれている。

ギリシアの征服

前358年、フィリッポスはマケドニアの西端からイリュリア人を撃退した。王はメトネ（エーゲ海北西岸）の包囲攻撃で片目を失明したにもかかわらず、前354年までにはマケドニアの沿岸部を掌握し、あとはカルキディケ半島を残すのみとなった。やがてこの半島で最強の都市、オリュントスを破壊し、前348年に半島を制圧した。

フィリッポスは第三次神聖戦争（前356～前346年）にも介入した。これは、デルフォイの隣保同盟（アンフィクテュオニア。デルフォイの神殿保持のために結成された神事同盟）が、テーバイとその同盟国と組んで、フォーキスの同盟国を相手に引き起こした戦いであり、フォーキス側にはアテネとスパルタもついていた。この戦争の終結に向けて役割を果たしたことで、フィリッポスの評判と影響力は高まった。アテネでは、政治家デモステネスがマケドニアに対する敵対心をかき立てていた。前340年、フィリッポスがビュザンティオンでアテネの穀物輸送の船団を包囲すると、対立は現実となり、アテネは宣戦を布告する。このアテネとマケドニアの紛争は、ほどなく、より大規模な第四次神聖戦争（前339～前338年）の波にのまれ、この機会に乗じてフィリッポスは南へと行軍した。侵略を警戒したアテネはテーバイと反マケドニアの連合を組み、前338年にカイロネイアでフィリッポスの軍と対決した。この戦いでフィリッポスが勝利すると、スパルタを除くギリシア各地は、マケドニアの覇権下に組みこまれた（スパルタの領土もやがてフィリッポスに奪われ縮小していく）。

ギリシアに安定をもたらしたフィリッポスは、ペルシア帝国への侵攻に意識を向けるようになった。しかし、前336年に護衛によって彼が暗殺されたため、ギリシアは不安定化し、マケドニアによる権威の再構築とフィリッポスの野望の実現は、息子のアレクサンドロス3世、すなわち「大王」に託された。



▷ 王の納骨箱
火葬されたフィリッポスの遺骨は、この金色の棺（骨箱）に納めたうえで、アイガイの王家の墳墓群の2号墓内にて、石棺に安置された。副葬品として、銀器類、象牙の長椅子、武具、王の大盾などが納められた。



◁ **アレクサンドロスの踏襲者**
勇ましい司令官姿のプトレマイオス4世の肖像を妻アルシノエと並べた前3世紀のカメオ（浮彫細工の装身具）。図像にはアレクサンドロス大王を思わせるモチーフが見られる。

ア語で行われた。エジプトにおける自身の王位の正統性を高めるため、プトレマイオス1世ソテルは、公務においてたびたびアレクサンドロス大王を引き合いに出した。たとえば硬貨にアレクサンドロスの肖像を用い、またアレクサンドリアに新たにヘレニズム都市（→pp. 242-243）を築いて首都とした。さらには、アレクサンドロスの遺体をマケドニアに運ぶ葬列から、その亡骸を奪ってメンフィスに持ち込んで埋葬したほどだった。

プトレマイオスは、行政の中心地もメンフィスからアレクサンドリアに移転し、その地で、ギリシアの文化と学問に寄与する大図書館の建設を命じた。こうしてエジプトの人々は、ギリシア化さえ受け入れれば、官僚機構に関わったり教育を受けたりする機会が得られたのである。このような方策は先駆的で、規範となるものだった。つまり、プトレマイオス朝のもとでは、文化の融合というよりもエジプト文化のギリシア化がもたらされ、ギリシア人によるエジプト文化の吸収は表面的な部分に限られていたのだ。

それでもプトレマイオスは、エジプト文化に若干の歩み寄りを示した。エジプトの宗教を許容し、またギリシア・エジプトの習合的な神であるセラピスを崇める宗教も、民衆の結束の高まりを期待して奨励した。

プトレマイオス1世の後継者

プトレマイオス2世フィラデルフォス（愛姉王）も、父に続いて表向きはエジプト文化を受け入れていた。そして兄弟姉妹間で結婚するファラオの伝統――エジプトの神話でオシリスが妹のイシスと結婚したことによる――を取り入れ、姉のアルシノエ2世と結婚した。この慣習はプトレマイオス朝時代を通じて続き、プトレマイオス4世フィロパトル（愛父王）などは、姉で妻のアルシノエ3世と自分の肖像を2人合わせて金貨に表し、その銘として「姉と弟」を意味する語を刻んだほどだ。

アレクサンドリアが、ギリシア世界の英知の中心地として、また地中海の主要な交易都市として創設されると、エジプトは、プトレマイオス2世フィラデルフォス（在位前284～前246年）とそれに続くプトレマイオス3世エウエルゲテス（恩恵王）（在位前246～前221年）のもとでも繁栄した。しかし前2世紀に、エジプトは度重なる外国の戦争に巻き込まれ、敗北こそしていないが国力はかなり低下し、ローマの干渉を招くことになった。プトレマイオス6世フィロメトル（愛母王）（在位前180～前145年）の治世には、前169年から前164年の間にセレウコス朝の王、アンティオコス4世による侵略を2度にわたって受け、ファラオが支配権を取り戻すためにはローマの支援が必須となった。プトレマイオス6世の没後、王家の多くの成員が王位継承をめぐって争ったため、秩序はほぼ崩壊し、エジプトは内戦状態に陥った。それに続いて、プトレマイオス朝では支配者6名が次々と短期間で入れ替わり、その誰もが権力掌握のためにますますローマの支援に依存した。前1世紀初頭までに、プトレマイオス朝は事実上、ローマ支配下の従属国と化した。

前51年にプトレマイオス朝の最後の統治者が即位した。女性のファラオ――女王は初めてではない――クレオパトラ7世だった。クレオパトラとローマ内戦の指導者たちとの関係（→下の枠内）は、ウィリアム・シェイクスピアの戯曲によって不滅の伝説となっている。前30年のクレオパトラの自害、さらに、女王がユリウス・カエサルとの間にもうけた息子カエサリオンの死により、プトレマイオス朝とそのエジプト支配は終わった。とはいえ、この頃までにヘレニズム文明が深くエジプトに根づいていたため、ギリシア文化とギリシア語はなおもエジプトで活況を呈し、その勢いはエジプトがムスリム軍の侵攻を受ける641年まで続くことになった。



△ **ギリシア的なエジプトの神**
この2世紀の絵画に描かれたセラピス神は、エジプトの神、オシリスとアピスを合わせ、ギリシア人に受け入れやすいよう人間の姿で表している。

エジプトの女王、クレオパトラ

クレオパトラ7世テア・フィロパトル（愛父の女神）は前69年に生まれた。高い教養と資質を備えた為政者で、複数の言語に習熟した有能な政治家であったクレオパトラは、父のプトレマイオス12世が死去すると、弟かつ夫のプトレマイオス13世の共同統治者となった。前48/47年頃には、ローマの独裁官ユリウス・カエサルの愛人となる。プトレマイオス13世が水死すると、弟のプトレマイオス14世と結婚。この夫が前44年に死去して、クレオパトラは自分とカエサルの息子であるカエサリオンを、共同統治者の地位に就けた。やがて彼女は、カエサルの後継者、マルクス・アントニウスと結婚した。この2人の軍勢は、両者に対し憤って宣戦を布告したアントニウスのライバル、オクタウィアヌス（のちの皇帝アウグストゥス）によって打倒された。クレオパトラは自殺し、プトレマイオス朝はついえた。



“魂の治癒の場として”

アレクサンドリア図書館に刻まれた銘文

エペイロスの王ピュロス

ローマの強敵となったギリシア勢力

極めて有能な司令官として、ピュロス王はエペイロス王国を強国へと成長させたが、共和政ローマに勝利した戦いで払った甚大な犠牲が、この王の名声に影を落としている。

ピュロスの人生と経歴は、前323年のアレクサンドロス大王の没後、遺された領域の支配をめぐって大王の将軍たちが争った激しい内乱によって形づくられた。ピュロスは前319年にギリシア西端のエペイロスに生まれ、2歳のときに反逆者に殺されかけてからは、タウランティの地でイリュリア王グラキアス（在位前335～前302年）の宮廷で育てられた。10年後にイリュリア王の計らいで、ピュロスはエペイロスに王として帰国できたが、前302年に従兄弟のネオプトレモスによって国を追われた。亡命の身のピュロスはディアドコイ戦争（→p.236）で、マケドニアの将軍、デメトリオス・ポリオルケテスおよびアンティゴノス・モノフタルモスと手を結び、大決戦となるイプソスの戦い（前301年）にも参戦した。

やがてピュロスはプトレマイオス1世の継娘アンティゴネと結婚し、義父の兵力を後ろ盾に前297年にエペイロスへ帰還し、内乱を避けるためネオプトレモスとの共同統治に同意した。そして、おそらくピュロスの命令によりネオプトレモスが殺害されると、ピュロスは単独で王位に就いた。

帝国への野望

ピュロスは首尾よくテッサリアの大部分とマケドニア西部を掌握したが、デメトリオスに続く統治者リュシマコスに敗れ、それらの領地を前284年までに失う結果となった。ギリシアで挫折したピュロスは、前281年、ローマと争っていた南イタリアの都市タレントゥムからの援軍要請に応じた。2万5000人の軍勢と20頭の軍象とともにイタリアに渡り、ヘラクレアとアスクルムでローマと戦い勝利を収めたが、その戦闘で払った犠牲は極めて甚大であった。

前278年、シチリア島のギリシア諸都市からカルタゴを撃退してほしいと求められ、ローマとの戦いを中断したいピュロスは要請に応じた。ピュロスはシチリア島のかなりの部分に攻め込み、前275年にはイタリア本土に戻った。しかし同年、ベネウェントゥムでローマに敗れ、ギリシアに帰国。ピュロスはギリシアで交戦を続け、まずマケドニア王アンティゴノス2世ゴナタスと対戦し、次にスパルタ、さらにアルゴスで戦った。アルゴスに入ったとき、ピュロスの部隊は狭い通りで動きが取れなくなり、屋根から瓦を投げつけられてピュロスは殺された。彼の死により、地域の支配的立場を狙うエペイロス王国の目論みはついえた。優れた軍事指揮官としてピュロスは長く記憶されたが、その名には「ピュロスの勝利」――敗北よりも損害が多い、割に合わない勝利――の意味合いが付きまとう。



△ **ローマ軍との戦い**
軍象を含むピュロスの軍がローマ軍と戦う場面が、17世紀フランドルの絵画に描かれている。



◁ **スタテル金貨**
ピュロスが発行したスタテル金貨。裏面（左）には勝利の女神ニケが表され、表面には戦いの女神アテナの姿がある。

前319年
エペイロス王アイアキデスとテッサリアの将軍の娘プティアの間にピュロスが誕生

前317年
父アイアキデスの反対派に命を狙われたピュロスは、イリュリアに脱出する

前307～前302年
エペイロス王として最初の即位から、ネオプトレモスによって追放されるまでのピュロスの治世

前301年
イプソスの戦いでピュロスは「際立った勇猛さを示した」（プルタルコスの記述）

前297年
数年間の亡命ののち、エペイロスに帰還

前287年
リュシマコスとともにマケドニアを占拠するも、前284年にリュシマコスに追放される

前279年
ローマとの戦争の結果、ピュロスは大打撃を被る

前278～前276年
シチリアにおけるカルタゴとの戦いに介入

前272年
スパルタへの攻撃から撤退して向かった先のアルゴスで殺される

アルキメデス

ギリシアの科学思想の大家

同時代の数世紀先を行く洞察と発見により、アルキメデスは、数学と物理の原理に関する理解を深め、数多くの工学分野の事業において実用化を図った。

アルキメデスは前287年頃、シチリアのギリシア植民市であるシラクサに生まれた。父のフェイディアスは天文学者で、前275年からシラクサを統治したヒエロン2世の縁者だったようだ。アルキメデスは若い頃に、北アフリカのアレクサンドリアで学んでいた可能性がある。この地に滞在中、天文学者で数学者であるサモスのコノンや、アレクサンドリア図書館長のエラトステネスと親交を深めたようで、アルキメデスがシラクサに戻ってからも、コノンとは生涯にわたり文通が続いた。そのほかにアルキメデスの人生について確かなことはほとんどわかっておらず、後世の文筆家が伝える逸話から、人柄と業績をうかがい知るのみである。



▽ **フィールズ賞のメダル**
現代の若手数学者の業績を讃えるフィールズ賞のメダルには、アルキメデスが表されている。銘文は「己の限界を超え、天地万物を会得せよ」という意味だ。

発明と発見

シラクサで、アルキメデスはおそらくヒエロン2世の顧問に起用され、有能な技師として名を馳せた。この地で、てこの原理を使った道具、複合滑車、スクリューを用いた揚水機（→p.272）などの実用化を進めた。アルキメデスは、物理と数学における深い洞察と革新に満ちた業績により、古代の傑出した科学者と今日見なされているが、当時その意義を理解していた者はわずかだった。

アルキメデスの著作には、幾何学の数々の定理の厳密な証明、てこと浮力の原理の論説、微分積分など数学ならではの抽象性の高い概念に関する論考が含まれる。アルキメデスについて最も有名なのは、「物体の体積は水の量に換算して測定できる」ことを発見した話だろう。ローマの著述家ウィトルウィウスによれば、アルキメデスは浴槽に浸かったときに水位が上がったことからこれを発見し、裸のまま通りに出て「エウレーカ！（わかった！）」と叫んだという。

第二次ポエニ戦争中（前218～前201年）、ローマ軍がシラクサを包囲したとき、アルキメデスが発明した装置が、侵攻を数カ月遅らせるのに役立った。特に有名なのが、並べた鏡に太陽光線を集め、向かってくる船に照射する兵器と、敵の船を沈める「アルキメデスの鉤爪」（クレーンの先に爪がついている）である。やがてシラクサを占拠したローマ軍は、アルキメデスの命を奪わないように指示された。だが、彼を見つけたローマ兵は、研究に没頭して邪魔されるのを嫌がるアルキメデスに待たされていら立ったのか、ローマの戦死者の復讐なのか、いずれにせよその場でアルキメデスを殺害したのだった。



△ **アルキメデスの書の発見**
『アルキメデス・パリンプセスト』は、アルキメデスの失われた著作が書かれていた羊皮紙に、ビザンツの祈祷書が上書きされたものだ。その中に、消失した書であった『方法（機械学的方法）』と『ストマキオン』の2点も確認されている。

> “しっかりした（てこの）支点をただ1つ与えてくれれば、私は地球をも動かしてみせる”

アルキメデスの言葉――アレクサンドリアのパッポス『数学集成』より

前287年頃
シチリアのシラクサにアルキメデス誕生

前267頃～前262年頃
アレクサンドリアを訪れ、天文学と数学を学んだとされる

前262頃～前240年頃
ヒエロン2世がアルキメデスを顧問に起用

前262頃～前240年頃
アレクサンドリアの学者との往復書簡により、アルキメデスの名が広く知られる

前240年頃
アルキメデスの浮力の原理を用いた巨大な船シュラコシア号を設計

前215年
ヒエロン2世の死後、シラクサとローマの同盟が崩壊

前213年
ローマに包囲される中、アルキメデスの兵器がシラクサの防衛に役立つ

前212年頃
ローマ兵に殺害される